

令和四年十二月吉日初版作成

# 永遠の光の花咲かす

高嶋 善三郎

## 目次

- 人間神の子観に立った批判力・・・・・・・・・・・・・3
- 永遠の光の花咲かす・・・・・・・・・・・・・4
- 日本の天命・・・・・・・・・・・・・5
- 私たち神人の決意・・・・・・・・・・・・・6
- （付記）
- 批判精神と悪口・・・・・・・・・・・・・7

### お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（携帯） 090-33346-6619

（Eメールアドレス） [zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## 人間神の子観に立った批判力

『人類即神也の宣言文』の中にある「いかなる批判、非難、評価も下さず、それらに対して何ら一切関知せず」について、これらの言動行為は知性をもったものなら、これらの行為は、当たり前ではないかと思えますが、どのように受けとめていけばよいのでしょうかという質問がありました。この質問について、整理してみましょう。

その前に、知性、批判、非難、評価の意味を辞書(広辞苑)でみると。

**知性とは**、感覚によって得られた物事を認識・判断し、思考によって新しい認識を生み出す精神の働き。知的能力。

**批判とは**、物事に検討を加え、その正否や価値などを評価・判定すること。特に、物事の誤りや欠点を指摘し、否定的に評価・判定すること。**非難とは**、相手の欠点や過失などを取り上げて責めること。

**評価とは**、品物の価格や人・事物などの価値を判断して決めること。また、その内容。

以上からみて、これらのワードは、人間の思考力、創造力をそれぞれ

の観点から具体的な精神的行為として現わしており、一つの意味合いを現わす言葉のグループといえます。

一方五井先生は、批判力について、「批判精神と悪口」(付記参照)において、次のように説明されています。

「宗教の道に深く広く分け入れれば入るほど、ハッキリとした批判力が出てくるもので、内に確固とした正しい直観的批判力をもちながらも、そうした批判力さえも消えてゆく姿と観じて、いかなる自他の言動に対しても振り回されず、把われのない生き方をしてゆくところにこそ、はじめて宗教的という空なる境地が展(ひら)けてきて、自ずと空即是色の真実の世界というものがその人自身の世界となってくるのである」。

また「信仰をする一人一人の人間の心において、人間性本来の智と直感が全く一つになってこそ、この世にも真実の世界が現われてくるのである。」と言及されています。

これらのお言葉から、次のことが整理できます。

人間が肉体生活を長年営んでいるうちに、肉体がすべてと思い込んでしまい、肉体人間観になり、人間神の子観を棄ててしまった、その結果

内に確固とした正しい直観的批判力を失い、肉体人間観に基づき批判することになり、かえって神に通じない想念行為業想念に新たなエネルギーを注ぎこみ、また自分自身がその業想念の渦の中に巻き込まれ、それを厚くすることになるといわれているのです。

そして、人間神の子観を思い出すことにより、内に確固とした正しい直観的批判力を取り戻し、「地球上に生ずるいかなる天変地変、環境汚染、飢餓、病気や世界中で繰り広げられる戦争、民族紛争、宗教対立など、不調和な現象は、これらすべて『人類即神也』を顕わすためのプロセスなり」という観方ができ、それらに対して何ら一切関知せず、ただひたすら人類に対して、神の無限なる愛と赦しと慈しみを与え続け、人類すべてが真、理に目覚めるその時に至るまで、人類一人一人に代わって「人類即神也」の印を組みつつけるだけでよいといわれているのです。そうすれば、それらの不調和な業想念は自然と浄まっていくのだといわれているのです。

## 永遠の光の花咲かす

この人間の知性のあり方について、五井先生のお歌『永遠の光』に言

及されている箇所があります。

(一)

自然に開くはなのこと

時来てめざむ神にこころ

祈りの道は深けれど

やがていのちの泉む

(二)

ひとそれぞれの性のまま

目指すは高き神の庭

導き給うみ使いは

天にも地にもおわすなり

(三)

己が心の和を保ち

ひとひとの幸ねがう身の

清らなひびき天地(あめつち)に

世界平和の道ひらへ

(四)

きらめく星は空にあり

輝く知性人にあの

神のみ心地に受けて

永遠の光の花咲かす

この歌詞の四番は、私達の知性を磨く道を指し示しています。

この全歌詞を見るたびに、五井先生がご帰神されて以降、昌美先生のご指導のもと、我即神也、人類即神也の印等が降ろされ、2003年から宇宙究極の一筋の光を降ろすご神事を七年間取り組んだ結果、私達のチャクラが開かれ、宇宙神から直接光を降ろし、神聖復活の印が降ろされてきた、次元上昇への輝かしい挑戦への日々が甦ってきます。

今日私たちは、神聖復活の印を通して、ただひたすら人類に対して、神の無限なる愛と赦しと慈しみを与え続けさせていただいています。

このような取り組みにより、肉体界で鍛えられてきた知性は、大光明の神聖を受けてそれと融合し、この肉体界に愛と大調和の永遠の輝かしい地球霊文明を築きあげていく中心の力になることでしょう。

## 日本の天命

日本の天命は、何かについて、白光誌2021年11月号26ページ

において『霊性の開発』から引用された五井先生のお言葉が掲載されています。その概要は次のとおりです。

「日本の天命は、霊（ひ）の、本である。つまり神霊の本ということである。つまり個人個人が霊性に還ることとともに、日本の国そのものも霊の国として改めて出発することなのである。神々の間には争いはない。霊の世界は相対のように現れることが出来るが、相対ではなく、絶対の力が、単に分かれているに過ぎない。そうした姿をこの現象界に現わすための、先頭に立つべき国が日本なのである。武器の力をもって、敵を想定して戦争の練習したりするのが、日本の真の姿ではない。統一されたる神の絶対力、神霊の慈愛の光明力をして各国各民族を照り輝かすのが日本の真の天命である。即ち大空に輝く太陽のごとく、みずからが光輝いていることによって、万物を生育せしめ、万物の働きを助けるのが、日本の真実の役目なのである。

日本の国は武力に勝る力をそのまま持っている光明力を持っている。それを日本人は忘れ果てているのである。その力は、神からそのままくする力、慈愛のみ光、救世の大光明の絶大なる力なのである。神は生き生きと働きつつけておられるのである。救世主はすでに天降っておられる。霊眼に観られる救世の大光明は、いかなる業想念をも敵と見ゆる存在を

も、すべて融合して光一元にし得る絶大なる力をもっている。」

「このお言葉の中で、「霊の世界は相対のよつに現れることが出来るが、相対ではなく、絶対の力が、単に分かれているに過ぎない。そうした姿をこの現象界に現わす」ことが日本の天命であると言われています。

この姿とは、愛と大調和の地上天国というものでしょう。

### 私たち神人の決意

そして、そのためには、私達神人は、どのように決意していくべきかを示されています。

「合気道の植芝盛平先生の無敵の姿はどこからくるかというと、神と一体になったところからくるのである。人間が神と一体になった瞬間から、その人には敵はなくなるのである。大調和の姿になるのである。それが合気道であり、世界平和の祈りなのである。それが日本の真の姿を現わす真の道なのである。

まず世界人類にさきがけて、日本人の一人一人が神との一体化を実現するところこそ、日本の使命が達せられる唯一の道であり、ひいては世界人類を恒久平和の道に導き入れる道でもある。

この地球界においては、力というものは絶対に必要なものである。しかし、この力というものが、普通いわれる武力による力関係というように思われているうちは、世界人類の平和は実現でき得ないし、日本の使命も永久に達せられない。

神力を信じつつけてもし仮に地球人類が減じるなら、それも神意によることなので、致し方ないではないか。どうせ、神から来た私達の生命なので、神のみ心のままでよいのではないか。神のみ心によって生かされているものであり、神のみ心のままでよいのではないか。神のみ心によって生かされているものであり、み心によらねば、肉体に存在することも、肉体を去ることも許されないものである。人間はそうしたわかったことをもう一度じっくり考え直さねばならない。

そうして、その真理をはっきり悟った人こそ生きるも死ぬるもない、永遠の生命を発現しつつけて生き続ける得る、真の人間、神人になり得るのである。その日のためにこそ私達は、世界平和の祈り一念で生きるこの大切なことを人類すべてに知らせようと活動しているのである。

「このお言葉は、私達が日々の生活の中で心がひるむ時に思い出せば、きっとあらゆる困難を乗り越えていく勇氣を手とてくねるでしょう。」

(付記)

## 批判精神と悪口

悪口をいわぬ事を善しとするのは

ふつう一般誰しもの心であるが

人の悪口をいいつける事によって

それで大いに人気を博している人もある。

そうかと思うと悪口と批判とを同一視し混同して

なんでもかでも他の人のいうことを

無批判に肯定しようとしている人もある。

たとえ口先で悪口をいってはいても

その心の中に悪の想いの少ない人というのは

その悪口が妙に親しみをさえ感じさせられるが

いまだ心のなかには諸々の不浄がありながらも

口先だけで人を褒めちぎってばかりいる人には

やはり空々しい感じを抱いてしまうもので

かえって近寄ってゆく気にはなれないものである。

人間というものは実に面白いものでして

口先ではよい事ばかりを言おうと考えて

声にでる言葉で良いことばかりいっていても

必ずしも想念がそれについてゆけるものではなく

これが逆に口先で悪口ばかりいっても

想念がいつでもきれいな人もあるわけで

だからこそ声に出ている言葉ばかりで

人を批判したり人格を評価したりしていること

だんだんと真実のものがわからなくなってくる。

人間の善し悪しや人格の高低というのは

その人の常日頃に抱いている想念と

自ずから行われている行為で判断されるべきであるが

普通の人ではこの判断が出来かねるものであるから

そこで直感的なものが必要になってくるのである。

その直感というものはどこからくるのかどうやって

心を常に常に澄み清まらせている所からくるものである。

澄み清まらざる為にはどうしたらいいのかと云うと

それには寝ても覚めても神を思いつづけられていると云

常に神のみ心の中に自己の想いを入れておくことである。

その誰にでも出来る一番易しい方法というのが

この私の説いている世界平和の祈りなのである。

これまでの宗教の欠点といえば

ああしてはいけぬ！

こうしてはいけぬ！

という戒律のようなことはかりを教えていて

いつの間にか神の子人間本来の生き方を

業想念の渦の中に引き下ろしてしまっていたのである。

一般に悪口をいってはいけぬと云うことでも

これが批判と悪口と全く一つにしてしまって

なんでもかでも人の悪を一切見てはならぬとして

まず人間性の実相を觀よと云うように説くので

あの人の行為はあれではいけないのではと

自分の心の深いところでは思っていないがらも

せつかく直感しえた心を

自ずからの力で抑えてしまつて・・・

無理にも相手の人の善いところばかりを觀ようとして

いつしかかえつて相手の悪い波に引き込まれてゆき

自らもその悪念波の渦の中にはいつたりいつたりして

神なる自己を欺瞞して生きていくという

まことに悪しき習慣がついてしまつたのである。

このような中途半端な生き方というのは

自己本来の大事なる直觀力というのを

小さな私の想念で抑圧している状態なのであつて

決して真実の宗教信仰者のとるべき態度ではありません。

いつでも何処でも必要とあらば

つねに真人(神人)というものは

悪と觀えるもの

善と觀えるもの



その画面とともに自己の心にハッキリうつし出して

その悪と観える事柄も善と観える事柄をも

それさえもが全て消えてゆく姿なのであり

すべてが消えてゆく姿であると観する思い・・・

その思いさえもが消えてゆくものであるとまで

直感でききうる本心の座に住処（すみか）を置いていくのである。

自分のごく普通人であり凡人なのだから

真人のような境地にはなれぬと思う人もあるだろうが

人間は誰でも本来は真人であるのは事実であるから

そのように神なる自己を否定し拒否する想念などを

まずは消えてゆく姿と想いつづけることから

次第に本来の自己（本心）が開顕されてゆくのである。

よって宗教のあるべき道というのは・・・

ただ無批判に何でも善なりと観ることでもないし

ただただ無防備になんでも受け入れるものでもない！

やはり宗教の道に深く広く分け入れれば入るほど

ハッキリとした批判力が出てくるものであって

まるで心が馬鹿のように無批判になるものではない。

内に確固とした正しい直観的批判力をもちながらも

そつした批判力さえも消えてゆく姿と観じて

いかなる自他の言動に対しても振り回されず

把われのない生き方をしつづけてゆくところにこそ

はじめて宗教的という空なる境地が展（ひら）けてきて

自ずと空即是色の真実の世界というものが

その人自身の世界となってくるのである。

人の悪口をいわぬのは勿論よいことだが

一切の批判力までも失わせてしまうような

そのような愚かで盲従的な宗教の在り方というのを

この私場合は決して是とするものではない！

信仰をする一人一人の人間の心の中において

人間性本来の智と直感とが全く一つになってこそ

この世にも真実の世界が現われてくるのである。

（故酒井博雄講師編集作成『五井先生のワールド第二巻』20ページ）